

ばんえい存続運動の功労者に訊く 当時の想いと再生の決意。 馬文化継承の取り組みは今も続く。



ばんえい競馬が存廃に揺れた10年前、存続に向けて尽力された服部調教師と、「NPO法人とかち馬文化を支える会」初代理事長・柏村文郎さんに、後世に残していきたいばんえいの魅力や未来、十勝の馬文化について伺いました。

「NPO法人とかち馬文化を支える会」
初代理事長

柏村 文郎 さん

「NPO法人とかち馬文化を支える会」初代理事長（現・理事）。元帯広畜産大学教授。専門は家畜管理学、家畜行動学、馬学。日本ウマ科学会理事、十勝どさんこ弓馬会会長などを務める。

ばんえい競馬・調教師
「北海道ばんえい競馬調教師会」副会長

服部 義幸 さん

9年間の騎手時代を経て、昭和60年調教師に。平成27年7月4日、ばんえい競馬調教師として最多の通算2,000勝を達成。ばんえい存続運動時には、北海道ばんえい競馬調教師会会長として尽力。

ばんえい競馬が作り上げた 世界唯一の馬を守りたい

——存廃問題で揺れていた平成十八年。印象に残っている当時の出来事などをお聞かせください。
服部 あの時ほど調教師、騎手、きゅう務員、そして馬主さんまでがひとつになって、懸命に頑張ったことはないですね。記憶に残っているのは、雪の中、札幌で署名集めをした時のこと。見ず知らずのおばさんや子どもたちが貯金箱や袋に入った小銭を持ってきて「これを使ってください」と言ってくれて。どれほど嬉しく、みんなの励ましになったことか。あの時に応援してくれた皆さんの期待を裏切つてはいけないと思っています。

柏村 僕が強く思ったのは、ばんえい競馬をなくしたら世界中でここにしかない特別な馬が消えてしまう、ということ。それがどんな意味を持つのか、みんな理解した上で廃止議論をしているんだらうか？ そんな思いから、存続運動に関わるようになったんです。——ばん馬が特別な馬だということ、柏村先生のご研究の成果で

もありましたね。

柏村 僕は日本馬事協会の仕事で、存続運動の十年ほど前から海外の農用馬の調査をしていました。欧米など各国で農用馬が減少していた時期です。ところが日本では、頭数は減っているものの、農用馬がばんえい競走馬として存続していた。ばんえいのコースには坂がある。それをひいてここを登るためには、足が短く重心の低い胴長の馬が有利です。ばん馬はサラブレッドと同じで、レースのルールに合うようにつくられた特別な馬なんです。そのことを多くの人に知ってほしかったですね。

競馬場のイメージを変えた 「ふれあい動物園」

——存続が決定し、平成十九年に「ばんえい十勝」が開幕しました。どんな思いでその日を迎えられましたか？

服部 「過去を清算して新たな気持ちで働く場所ができた。これからは一歩一歩努力を積み重ね、ばんえい十勝を良いものにしてよう」。みんなそう思っていましたね。応援してくれた日本中の人たちに好

かれるようになりたいというのがみんなの気持ちでした。

柏村 九十五パーセント廃止と言われていた流れを変えたのは、市民の存続運動でしたからね。競馬ファンだけに頼っていたら、ばんえい競馬はなくなっていたかもしれない。

服部 市民の誰もが足を運べる競馬場にするには、ギャンブルだけのイメージを払拭する必要があります。僕は前々から、競馬場には六百頭も七百頭も馬がいるのに、市民が馬を身近に見たり触れたりできないのが気になっていてね。そんな時にパドックがスタンド正面に移動し、スペースが空いた。この跡地を活用して始まったのが「ふれあい動物園」です。

——最初はばん馬・リッキーの家も手作りでした。

服部 あの時騎手会の人たちや、競馬関係者以外の仲間もボランティアで手伝ってくれてね。みんなの力を借りて、子どもたちや観光客が馬に乗ったり触ったりできる場所ができた。ただ、来てくれた人たちが無理に競馬場に誘導しようとは思っていません。レースを見たい人は見る、馬券を買い

たい人は買う、それでいい。それよりも「競馬場って楽しいところだったね」と言ってもらえる場所になってほしかった。それが少しずつでも売上げにつながっていくばいと思っています。

柏村 「ふれあい」ができたおかげで女性や子どもも抵抗なく競馬場に来られるようになりましたね。ギャンブルは苦手でも馬は好き、という人も来やすくなった。競馬は「見るスポーツ」でもあるので、馬と触れ合う場があつてほしい。そこで馬好きの子どもをたくさん育てる（笑）。馬を扱える若い人が減っている今、馬文化の担い手を育てることも必要です。「ふれあい」はそうした役割も担っていますから、すごく応援したいと思っています。

——リッキーは平成十九年から帯広市特別嘱託職員になり、その後ミルキー、キングも加わって、PR活動を行うようになりました。
服部 彼らが幼稚園や保育所に行くくと、子どもたちがそれはもう喜んでくれてね。みんな笑って、あの大きな馬に触ってくれる。やつてよかったと思えるのは、そんな時です。

反対派の意見にも耳を傾け 市民をひとつに

—— 柏村先生は、ばんえい存続が決定した平成十九年にNPO法人とかち馬文化を支える会を発足されましたが、その経緯を教えてください。

柏村 帯広市単独開催が決定したとはいえ、市民の中には反対の人もいました。ギャンブルだから好ましくないと考える人も多かったです。市民が一体となってばんえいを支えていくには、市や競馬関係者と反対派の間に入る存在が必要でした。そこで、利益に無関係のばんえい応援団としてNPOを設立しました。市民集会を開き、賛

成派も反対派も自由に意見が言える、そんな場を作ることが重要だったのです。「とかち馬文化を支える会」は、単にギャンブルとしてのばんえい競馬の応援団ではありません。帯広に、馬を介した市民のサークルがあることを示すことが大切でした。

—— ばんえい競馬に反対する意見として、動物虐待だという声がよく上がりますね。
柏村 当時も、ばんえいは馬にムチを使うから嫌いだと言う声がありました。実際はムチではなく手綱なのですが、もしムチが馬への虐待だったら、馬は人間の言うことをきかなくなるでしょう。馬が言うことを聞くのであれば虐



待ではない。僕はそう思っています。馬は、初めて人間を乗せる時には大暴れますからね。そこかから馬に「こうするんだよ」とひとつずつ教えながら育てていく。そうやってステップを踏んで教えていくと、馬は人間の要求に応えるようになり、ムチもひとつの合図としてとらえるようになります。ムチに反対する人は、馬に接していない人が多いように感じます。

—— 先生がこの問題で研究されたのは、べん打ちと馬の心拍数の関係でしたね。
柏村 はい。走っている最中の馬の心拍数と血液中のストレス物質の数値を測りました。レース中に

ムチを当てた時に、もし数値が上がったら、これは馬が痛がっていることになります。ところが計測してみたら、まったくそんなことはなかった。

服部 その話を聞いて、僕たちも虐待ではないと外に対して自信を持って言えるようになったので、ありがたかったです。
柏村 しかし動物福祉の視点で見ると、虐待の基準は見る人の気持ちにも置かれています。見る人が虐待と感じてしまうのなら、それは虐待ではないかという考え方です。そのためヨーロッパではムチの使用は制限されています。その意味で僕は、ばんえい競馬も無駄なべん打ちは減らした方がいいと思っています。見る人の目も大事ですから。

服部 実は、ばんえい競馬も手綱の輪打ちができない時代もあったんですよ。中西関松さん※たちの時代は、手綱をよいしょ、よいしょと左右に振って馬の腰に当て、巧みに馬を操っていました。その上で立つことが禁止され、騎手が座っていた時代もあります。競技方法も、関係者の試行錯誤で変化してきたんです。べん打ちに関



しても、いろいろ経て今がある。今のやり方がベストかどうか、結論は出ていませんが。

感動や笑顔を与えてくれる 馬の力を知ってほしい

—— ばんえいの魅力はどこにあるとお考えでしょう？

服部 大地を踏みしめて一步一步進む馬の姿には、引き込まれる何かがあると思います。レース写真を後から見ると、どの馬も障害を越える時は、頑張っている顔をしている。魅力はそこにあると思う。お客さんもそれを見て「あんなに頑張ってるよ、すごいな」と感動

する。だから最後にゴールした馬にも拍手を送るんですよ。

—— 十勝の馬文化という観点ではどんな役割を果たしているとお考えですか？
柏村 世界で千人当たりの馬の頭数を調べると、ヨーロッパは十頭なのに対し、日本は一頭にも満たない。ところが十勝は、ヨーロッパレベルなんです。ばんえいがあるから農用馬がいて、獣医師や馬具職人も必要になってくる。馬を飼う文化が十勝にあることの重要さをもっと伝えていかないと。

—— 今後の先生方の抱負、夢などをお聞かせください。
服部 「続けること」。これがひと



く難しい。存続が決まってからも大変な時期が続いたんですが、みんな我慢して頑張った。それがここ一二年で少し報われてきたと思います。でも、現状に甘んじてはいけません。健全な競馬を未来に残していくよう努力しないとね。
柏村 これからは質を高めていく時期でしょうね。きゅう舎関係者の待遇を改善し、ばんえい騎手がJRAの騎手を上回るくらい、子どもたちの憧れの職業になるようにしていく。これが次の目標でしょうか。個人的には今、障害者乗馬の取り組みに力を入れていますが、障害者の人たちが馬に乗ると、それだけでもうニコニコしてくれ

る。馬というのは、大きな可能性と不思議な力を持っていると思います。
服部 ばんえい十勝は十年たつて、やっとゲートから出たばかりだと思う。平地競馬に比べたら、歴史もまだまだ浅い。やるべきことはたくさんあるし、いいと思ったことは何でもやろうと考えています。障害者乗馬も「ふれあい」でやってみたいし、馬一頭ゆつくり走れるようなミニ走路を造って、お客さんにレースを体験してもらいたいですね。安全第一だけれど、低い障害も造ってね。子どもや海外からのお客さんにすごく喜ばれると思う。ばん馬ってこんなに力強く頑張る屋さんなんだ。そう思ってもらえる場所を作りたいですね。